

## 第100回春陽展と 春陽会版画の歩み

*Shunyo-kai prints history*



長谷川 潔



前田藤四郎



北岡文雄



駒井哲郎

春陽会は 1922 年、「互いを芸術家として尊重し、各自の芸術的良心を大切する」という理念をベースに結成され、草創期から油絵だけでなく、水墨画、素描、版画なども展示され、他の美術団体に見られない特色がありました。

1924年第2回展では春陽会賞を受賞した河野通勢がエッチングを出品しています。1928年の第6回展では、在仏の長谷川潔が会員として迎えられ、この年に版画室が設置されます。版画室設置により、創作版画運動の影響もあり、後に日本の版画界で活躍する著名な版画家達が挙って出品していたことが出品目録から分かります。創作版画に関していえば、山本鼎、石井鶴三といった春陽会会員の功績は大きく、日本近代版画史の中で春陽会の存在は特筆すべきものがあります。

しかし、戦争の足音が近づく中、版画の出品者は少なくなり、1940年に前田藤四郎が会員になったくらいで低迷します。前田は、1929年第7回展初出品で、後に関西版画界の長老として活躍します。

戦後の混乱期に、春陽会も大きな打撃を受けましたが、1951年に舞台美術部が設置され、版画部も部として認知されます。この年の会員は長谷川潔と前田藤四郎の2名でしたが、北岡文雄と駒井哲郎がこの年に会員になります。翌年の1952年には、北岡の提唱で、絵画部で行っていた版画の審査を版画部で独自に行うことになり、名実ともに版画部が独立した年と言えます。

独自審査開始時は、在仏の長谷川潔を除き、北岡、前田、駒井の3名で「繊細でモダンな洗練されたきめの細かい版画」を春陽会版画の特長として審査にあたりました。1955年以降、版画部はさらに充実し、古川竜生、清宮質文、小林ドンゲ、馬場禱男、齋藤カオルなどが活躍していきます。